

■永井隆 医学者。白血病に加え被爆で重症も被爆者治療に献身。映画化され流行歌になった「長崎の鐘」ほか、記録著作多数。
ながいたかし
アラギ 創刊・1908＝ 島根県松江市で、永井寛・ツネの長男に生まれる。
伊藤博文暗殺1909＝ 1歳：この年、父が本籍を島根県飯石郡飯石村(三刀屋町)に移し、医院を開業。

明治天皇没・1912＝ 4歳：

第一次大戦始1914＝ 6歳：飯石村尋常高等小学校尋常科に入学。

ロシア革命・1917＝ 9歳：

大暴落・・・1920＝12歳： 優等生として飯石郡長賞受賞し、卒業。島根県松江中学に入学。
原敬首相暗殺1921＝13歳： この間、母方の親類米塚家に下宿。

護憲三派圧勝1924＝16歳： A組級長となる。 校旗旗長を命じられ、摂政の宮(昭和天皇)を迎え、殿下から会釈を賜る。
治安維持法・1925＝17歳： 卒業。松江高等学校高等科理科乙類に入学。
円本時代始・1926＝18歳：

共産党事件・1928＝20歳： 卒業。皇太子殿下下賜金賞を受ける。長崎医科大学に入学し、移住。
世界恐慌・・・1929＝21歳：長崎医科大学に箒球部創設。上海などに遠征。
海軍軍縮条約1930＝22歳：母ツネが病死。短歌会{アラragi}に入会。
満州事変・・・1931＝23歳：
五一五事件・1932＝24歳： 卒業送別会終えて帰宅後、溶解性連鎖球菌による急性悪性中耳炎となる。手術を受けるも一時重体。卒業生総代として答辞を読むことになっていたが読めずに、卒業。中耳炎のため専攻の内科を断念し、放射線医学を専攻。副手嘱託。物理的療法科勤務。長崎医科大字助手。徴兵検査を受け、甲種合格。

国際連盟脱退1933＝25歳： 依願免官。陸軍軍医候補生として広島歩兵第十一連隊に入隊し、見習い医官から陸軍二等軍医となる。従七位。傷病兵輸送のため満州事変に従軍。第五師団特別演習に参加し、賞状。

帝人疑獄事件1934＝26歳： 勲六等瑞宝章。 予備役となり、長崎医科大字副手として物理的療法科に復職。カトリックに改宗受洗。霊名聖パウロ。マリナ森山緑と結婚。長崎医科大学助手。

芥川直木賞始1935＝27歳： 急性咽喉炎で蛋白剤を注射したところ肺水腫となり、一時危篤。後遺症でぜんそくが持病となる。
日中戦争始・1937＝29歳： 長崎医科大学講師。 予備役のまま陸軍軍医中尉。日中事変のため広島歩兵十一連隊に入隊。第五師団衛生隊に編入し衛生隊医長。中国大陸で七十二回の戦闘に従軍。

第二次大戦始1939＝31歳： 父寛が病死。勲五等瑞宝章。
大政翼賛会・1940＝32歳： 帰還し召集解除。長崎医科大学助教授。物理的療法科部長就任。功五級金鶏勲章・勲五等警光旭日章。
日米開戦・・・1941＝33歳：
年金+総武装 1944＝36歳： 「胆石の微細構造」で医学博士。勲四等瑞宝章。
敗戦・・・1945＝37歳： 正六位。*原子爆弾が投下され、長崎医科大学で被爆。右側頭動脈切断の重傷の応急手当を受け、負傷者の救護にあたり、一時昏睡に陥る。慢性骨髄性白血病と診断される。

新憲法公布・1946＝38歳： 白血病が悪化し国鉄浦上駅内で倒れる。カトリック新聞に「科学者の信仰・学徒に贈る」連載。「壕舎随想」を講演。「原子病と原子医学」を研究発表。以後、自宅で療養と執筆生活。

新憲法施行・1947＝39歳： *「原子病患者の手記」を発表。「原子野録音」連載。「死の真理探求」。小説「黒百合」掲載。
極東裁判判決・1948＝40歳： 浦上カトリック大工組合等寄贈の「如己堂」に転居。「この子を残して」「ロザリオの鎖」刊行。石工に依頼し「玉の緒の命の限り吾はゆく寂かなる真理探求の道」と刻み建立。長崎医科大学教授を休職。「生命の河」を脱稿。「亡びぬものを」刊行。ヘレン・ケラー来訪し励まされる。「生命の河」刊行。痔から出血多量。九州タイムス文化賞を受け、賞金で長大医学部に吉野桜若木五十本を植える。このほか著作印税で「浦上千本桜」として教会・学校・原爆爆心地公園・各家庭に千三百本植える。

三大事件・・・1949＝41歳： *「共産党を愛せよ」掲載。「長崎の鐘」刊行、ベストセラーとなり、英語・ドイツ語ほか各国で翻訳される。容態悪化。バラ座公演「長崎の鐘」を浦上カトリック教会で住民と共に観賞。「病人で医者で信者である私」を放送。昭和天皇が九州巡行で来崎した際、見舞いの言葉を賜る。浦上カトリック教会での聖フランシスコ・ザビエル渡来四百年記念式典に担架で出席、聖腕に接吻。教皇特使のギルロイ枢機卿から見舞いの言葉を受ける。「花咲く丘」刊行。共訳「野ねずみ」刊行。永井隆編「原子雲の下に生きて」刊行。長崎医科大学教授を辞職。筋力減退著しい。「平和塔」掲載。「いとし子よ」刊行。不整脈の発作。長崎市名誉市民第一号。長崎市立山里小学校校庭に「あの子らの碑」建立。

朝鮮戦争始・1950＝42歳： 詩「南天の花」掲載。恩師末次逸馬が放射線障害で死去。駐日教皇使節フルステンベルグ大司教から教皇ピオ十二世賜下の木製ロザリオを授かる。国会の表彰勅告で、昭和天皇賜下の金杯と吉田茂内閣総理大臣表彰状を受ける。松竹製作「長崎の鐘」の試写会を如己堂で住民と共に観賞し感涙。身体がやせ始め高熱続く。

独立回復・・・1951＝43歳： *「お返事集」を連載。長編小説「村医」を脱稿。全身に浮腫。「乙女峠」脱稿。執筆不能となり、激痛を訴えて、長崎大医学部付属病院に入院。まもなく没した。従五位追贈。浦上カトリック教会葬。長崎市公葬。